

YMCA バイオニアストーリー

近代スポーツの普及とYMCA
日本初のオリンピック監督・大森兵蔵の生涯

東京YMCA体育館略年表

1880年 (明治13年)	東京YMCA創立
1894年 (明治27年)	神田に初代会館建設
1907年 (明治40年)	山本邦之助総主事が欧米視察
1908年 (明治41年)	大森兵蔵が体育主事に就任 バスケットボールとバレーボールを紹介
1913年 (大正2年)	1月、大森兵蔵死去 10月、北米YMCA主事F.H. ブラウン来日 (=写真)
1917年 (大正6年)	日本初の室内温水プール付総合体育館建設。クローラなど近代泳法を普及。記念式の案内書には「この運動場の特長は、命的に行はるるにあらざりて、社会的に行はるるにあり、且つ日本には当来類例のない面白き新式の競技体操を行ふを得るにあり」とその画期的な楽しさを謳っている。
1923年 (大正12年)	関東大震災・体育館焼失
1927年 (昭和2年)	体育館修復工事完成
1930年 (昭和5年)	デンマーク体操講習会
1932年 (昭和7年)	ロサンゼルスオリンピック水上チームが東京YMCAで強化合宿。水泳だけでなく食事のマナーなども学んだ。YMCA主事として体操指導者の柳田亨がトレーナーとなり、渡米のための2週間の船旅で「陸上トレーニング」を実施。金メダル5個という快挙へ導いた。
1940年 (昭和15年)	1940年開催予定だった「幻のオリンピック」のため東京YMCA理事長・山本忠興が招致活動に参加。国際ホテル専門学校を設立して外国人選手を迎える準備をした。
1943年 (昭和18年)	戦時下では「大東亜体育館」と改称しながらも活動を続けた。
1945年 (昭和20年)	終戦後YMCA会館・体育館はGHQに接収
1949年 (昭和24年)	接収解除、会館返還
1950年 (昭和25年)	女子が初めて体育館使用を認められる
1962年 (昭和37年)	YMCA協力主事アル・バックリーがオリンピック東京大会の渉外部嘱託となる
1963年 (昭和38年)	体育館建て替え工事開始
1964年 (昭和39年)	10月10日東京オリンピック開幕。東京YMCAは神田の会館内にインフォメーションセンターを設置。案内ボランティアを務めた。また国際ホテル専門学校生たちは選手村の運営を手伝った。国際オリンピック委員会(IOC)会長ブランドー・ジ氏 (=写真左から2人目)はオリンピック開催の最中にYMCAを訪れ、スピーチを贈られた。「一国の富はどのような資源や施設をもつかによって測られるべきではない。次代を担う青少年がどのような環境のもとに、どのような理念によって育てられているかで決定されるべきである。この意味においてYMCAの社会に果たすべき役割は大きい。」
1965年 (昭和40年)	東京都より東京オリンピック大会協力感謝状授与。2代目体育館が完成。



日本初出場のオリンピック・ストックホルム大会の入場(1912年)。後列左から2人目が大森兵蔵



大森兵蔵は1876年(明治9年)岡山県生まれ。東京高等商業学校(現・一橋大学)入学後、米スタンフォード大学経済学部で留学。しか

今から約100年以上前、「兵式体操」や「普通体操」が主流だった大正初期の日本に、YMCAは多くの近代スポーツを紹介した。「青少年の健全な育成」のため、誰もが楽しめるスポーツを普及しようという力を尽くしたYMCA主事たちの中から、今年のNHK大河ドラマ「いだてん」にも登場予定の「大森兵蔵(おもり ひさくさ)」を紹介したい。(広報委)

当時の北米YMCAは国内300カ所以上に体育館や温水プール、図書室、カフェテリア、宿舎などを備えた大きな会館を作り、青少年の「精神的、知的、社会的、体育的」向上のためのプログラム(Road Road)を学んだ。

国民の体格向上に尽くすと決意

1905年に中途退学し、国際YMCAトレーニングスクール(現スプリングフィールド大学)の体育主事養成科に編入して、体育・スポーツを学んだ。

最先端のスポーツを学んで

入学後に兵蔵が学んだのは、生理学、体力測定、マッサージ、衛生学、健康診断法、トレーニング方法、体育史などさまざまな青年たちが集い、レクリエーションやスポーツ、教養プログラムなどを学び、有意義な余暇を過ごしていた。大森兵蔵が入学したYMCAスクールは、その事業を運営・指導するためのスタッフ養成所であったが、だからこのYMCAの活動に惹かれたのではないかと語られている。YMCAの体育主事で後に来日するF.H.ブラウンの勧めもあって、「日本の国民の体格位向上に尽くす」と決意した。

バスケットボールを初めて紹介

1908年に帰国後は東京YMCAで初代体育主事となり、日本ではまだ誰も知らなかったバスケットボール・バレーボールを紹介したほか、陸上競技の指導などもしてスポーツの普及に努めた。日本女子大学や慶応

学、健康診断法、トレーニング方法、体育史などの科目と、バスケットボール、バレーボール、フットボール、ホッケー、陸上競技、器械体操、屋内外遊戯といった、まさに最先端の体育・スポーツの理論と実技である。また彼は在学中、アルバイト先で知り合った20歳年上の画家アニー・B・シエブリーと結婚。卒業後は共に帰国し、アニーは大森安仁子と改名した。

大森兵蔵はまた安仁子夫人と共に社会福祉施設「有隣園」を作った。幼稚園と授産所、図書館を兼ねた先駆的なもので、安仁子夫人は後に兵蔵が亡くなったからもこの施設の運営を続けたという。

兵蔵はまた安仁子夫人と共に社会福祉施設「有隣園」を作った。幼稚園と授産所、図書館を兼ねた先駆的なもので、安仁子夫人は後に兵蔵が亡くなったからもこの施設の運営を続けたという。

兵蔵はまた安仁子夫人と共に社会福祉施設「有隣園」を作った。幼稚園と授産所、図書館を兼ねた先駆的なもので、安仁子夫人は後に兵蔵が亡くなったからもこの施設の運営を続けたという。

兵蔵が作ったコートでバレーボールする会員の宣誓、東京YMCA

兵蔵は同時期に欧米を視察した東京YMCA総主事・山本邦之助もまた、日本にぜひ体育館と室内プールを建設したいと考え、理事会に提案した。しかし明治以降日本では、一般庶民がスポ

先駆者への逆風 英語講師に転身

兵蔵は同時期に欧米を視察した東京YMCA総主事・山本邦之助もまた、日本にぜひ体育館と室内プールを建設したいと考え、理事会に提案した。しかし明治以降日本では、一般庶民がスポ

とした設備がない「屋内体育場をもつと用意すべきである」とある。兵蔵は唯一の欧米スポーツ経験者としてオリンピック監督に選ばれ、悪化していた結婚をおし、命がけで渡航する。長旅の途中でも吐血し、アニー夫人に付き添われ、時に選手に背負われることもあったという。大森後には帰路のアメリカで、日本に帰ることなく亡くなった。37歳だった。

この頃から兵蔵は肺結核を発病した。にもかかわらず1911年には、講道館柔道の創始者・嘉納治五郎の要請により「天日本体育協会」の創設に携わり、その総務理事に就任。400mトラックのある競技場を新設してオリンピック予選競技会を開催し、翌年スウェーデンのストックホルムで開催された第5回オリンピックに、日本で初めて2人の選手を送るこ

とを決めた。マラソン選手の高木四三と、短距離の三島弥彦である。兵蔵は唯一の欧米スポーツ経験者としてオリンピック監督に選ばれ、悪化していた結婚をおし、命がけで渡航する。長旅の途中でも吐血し、アニー夫人に付き添われ、時に選手に背負われることもあったという。大森後には帰路のアメリカで、日本に帰ることなく亡くなった。37歳だった。

それから約半年後の1913年10月、北米YMCAからF.H.ブラウンが派遣される。彼は17年間わたって日本に滞在し、兵蔵の後を継いで各種スポーツの普及につとめた。1917年極東オリンピックの最中、大森兵蔵をもつて(水谷豊 著平凡社)

まかれた種は 大樹となつて

大森兵蔵の志は多くの人に受け継がれ、日本近代スポーツの発展へと開花していったのである。

ポール日本代表に京都YMCAチームが選ばれたのも彼の功績が大きい。また1913年の理事会ではようやく、日本初の室内温水プール付き総合体育館の建設が決まり、1917年に完成。近代泳法はじめ飛込み、器械体操、ボクシング、レスリングなどを紹介し、一般庶民にスポーツの楽しさを広めた。特に温水プールはその後数十年間、唯一の冬場の練習場だったため、日本の主要な選手たちがここで育っていた。